

小学校

光村ポケット 国語

「書くこと」の 小単元×大単元

「書くこと」の力をつけるには、積み重ねが大切です。そこで、教科書では、2学期と3学期の冒頭に小単元「書くときに使おう」を設定し、そこで学習したスキルを学期後半の大単元の活動で使えるようにしています。小単元で書くスキルを学び、大単元でいかす。その仕組みについてご紹介します。



連載第2回 国語における探究的な学び



LINE公式アカウント友だち募集中!



授業づくりに役立つ情報を、
いち早くお届けします。



光村図書

教授用資料 本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

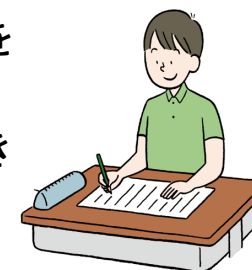
「書くこと」の小単元×大単元

「書くこと」の指導で、
こんな悩みを
抱えていませんか？

一つの単元で教える
ことが多くて大変……。

書く力がなかなか
身につかない……。

小単元と大単元のつながりを
意識することで、負担感なく、
書く力の定着を図ることができます。



小単元 でスキルを学ぶ

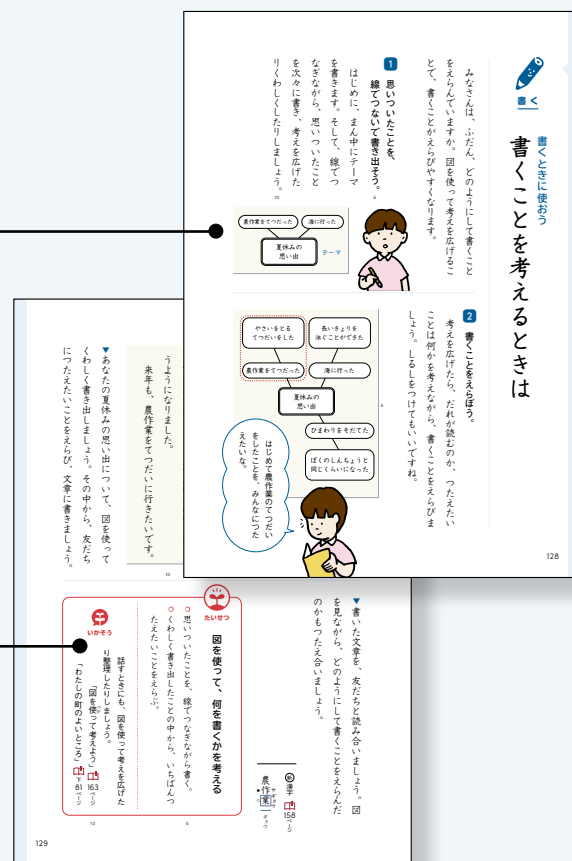
2学期、3学期の小単元「書くときに使おう」では、書くときに役立つさまざまなスキルを学びます。ここで学んだスキルは、その後に学習する大単元の中で実際にいかすことができます。

✓ 書くスキルを焦点化して学習

単元ごとに一つのスキルに絞っているので、短時間でポイントを押さえることができます。構成に関わるスキル、描写のスキル、推敲のスキルなど、時期や学年によってさまざまなスキルを扱っています。

この単元での学びがいかせる大単元を、**いかそう**で紹介しています。

ここで学んだ、図を使って書くことを考えるスキルは、2学期後半の大単元「わたしの町のよいところ」で使えるんだね。



「書くことを考えるときは」(3年上128-129ページ)

大単元 でスキルをいかす

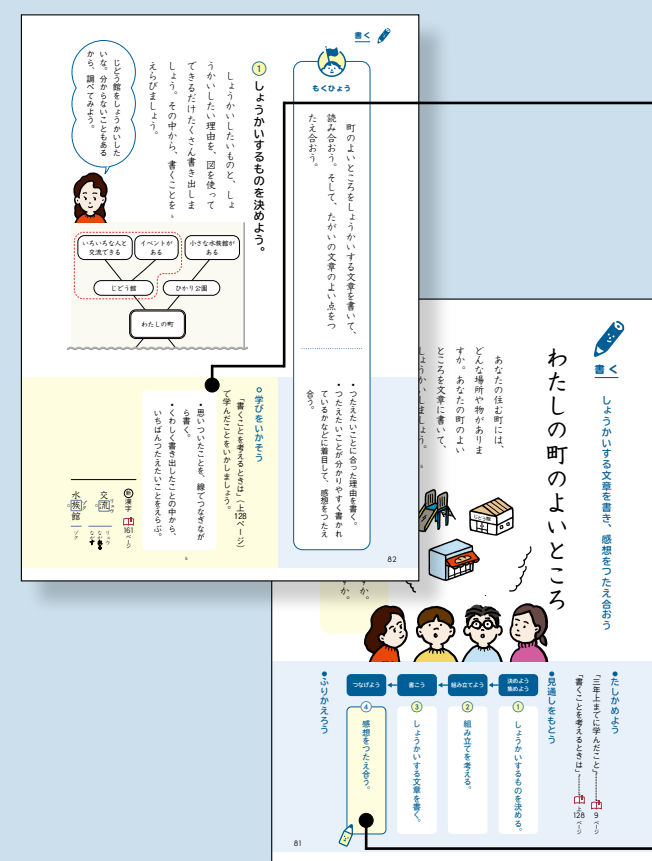
2学期、3学期の「書くこと」の大単元では、紹介する文章や意見文を書いたり、物語や詩を創作したりします。ここで、小単元で学んだスキルをいかすことができます。

✓ 書くスキルの定着

小単元で学んだスキルがいかせる学習過程では、「学びをいかそう」を設定しています。一度の学習ではなかなか身につかないスキルも、その後の大単元で実際に使ってみることで、定着していきます。

✓ 大単元での学習がスムーズに

一つの単元に初めて学ぶことが多いと、先生も子どもも負担に感じるでしょう。小単元を活用すると、大単元ではそこで学習したスキルについて一から説明する必要はなく、重点的に指導したい箇所に焦点を当てて授業を展開することができます。



「わたしの町のよいところ」(3年下81-82ページ)

小単元×大単元の 一覧

- | | |
|-----------------------------|----------------------------|
| ・2年：「書いたら、見直そう」(上120ページ) | → 「お話のさくしゃになろう」(下74ページ) |
| ・3年：「書くことを考えるときは」(上128ページ) | → 「わたしの町のよいところ」(下81ページ) |
| ・4年：「どう直したらいいかな」(上126ページ) | → 「もしものときにそなえよう」(下84ページ) |
| ・5年：「文章に説得力をもたせるには」(110ページ) | → 「あなたは、どう考える」(184ページ) |
| ・6年：「文章を推敲しよう」(108ページ) | → 「おすすめパンフレットを作ろう」(188ページ) |

- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| ・3年：「四まいの絵を使って」(下92ページ) | → 「たから島のぼうけん」(下111ページ) |
| ・4年：「言葉から連想を広げて」(下94ページ) | → 「心が動いたことを言葉に」(下117ページ) |
| ・5年：「言葉でスケッチ」(194ページ) | → 「もう一つの物語」(217ページ) |
| ・6年：「知ってほしい、この名言」(198ページ) | → 「大切にしたい言葉」(221ページ) |

探究学習を国語科の授業で取り入れるには、どのような手立てがあるとよいのでしょうか。第2回は、前田康裕先生（熊本大学）に、「書くこと」教材の「おすすめパンフレットを作ろう」（6年）を例にして、効果的な授業の工夫を提案いただきました。

① 子どもが見通しをもって学べるようにしよう

子どもが自分で学びを進めるには、「どんな順番で何をするのか」を理解し、自分なりに計画を立てられるようにすることが大切です。「おすすめパンフレットを作ろう」では、学習活動が次のように段階的に進みます。

1. 推薦したいものを決めて、情報を集める。
2. パンフレットの構成を考える。
3. 割り付けを考える。
4. 推薦する文章を書く。
5. 読み合って、感想を伝え合う。

これらのステップに、子ども自身が「いつまでにやるか」「どんな方法でやるか」といった要素を加えることで、主体的に見通しがもてるようになります。それにより、自分で目標を設定して計画を立て、情報を集め、自己調整しながら学習をするという「探究学習の進め方」が身についていきます。

② 学習のプロセスを振り返って、評価できるようにしよう

パンフレットを作る活動の過程で「どんな力を身につけるか」ということを、子ども自身が意識して学習することが大切です。

そのために、例えば、右の表のような三つの観点で、毎回の授業後に振り返りをさせるとよいでしょう。それを基に、教師は形成的評価を行います。「言葉や構成の理解」に関して、「レイアウトがうまくいかなかったので、次までにパンフレットの例を集めたい」といった記述があれば、「経験を次の学習にいかす」という前向きな姿勢として評価します。さらに、こうした記述をクラス全体で共有することで、子どもたちが振り返りのしかたを学んでいけるようにしていくのです。

評価の観点	子どもの目線での問いかけ
言葉や構成の理解	「パンフレットに必要な言葉の使い方や、構成の工夫が分かったか？」
表現の工夫	「読む人のことを考えて、どのように伝えるかを工夫できたか？」
友達との協力	「友達と意見を出し合って、よいアイデアが生まれたか？」

③ 成果物をルーブリック（評価基準）で評価できるようにしよう

単元の最初にルーブリックを子どもと共有しておくことで、学習のゴールが明確になり、子どもたちは目的意識をもって、パンフレット作りに取り組めるようになります。

下の表は、その例です。このようなルーブリックがあれば、グループ内での相互評価や、自分の作品の見直しも促せます。つまり、教師がいなくても、自分たちで成果物をブラッシュアップできるようになるのです。

評価項目	S（たいへんよい）	A（よい）	B（もう少し）	C（がんばろう）
効果的な構成	見出しや構成に工夫があり、とても読みやすい。	構成が整っていて、読みやすい。	読みにくい部分がある。	内容がばらばらで、読みにくい。
読む人を引きつける文章	表現に工夫があり、読みたくなる内容になっている。	すすめたい気持ちが伝わる。	伝えたい気持ちはあるが、少し分かりにくい。	読む人のことを考えていない。
伝わりやすい写真	内容とぴったり合い、説得力を高めている。	内容に合っていて、補助的に役立っている。	内容とのつながりが弱い。	内容と関係がなく、伝わらない。

